所員自著紹介

1. 書名：『戦後日本と中国・朝鮮―プランゲ文庫を一つの手がかりとして』
2. 編者：大里浩秋
3. 出版社：研文出版
4. 出版年月：2013 年 3 月
5. ページ数：470 頁

この本は，わが人文学研究叢書の一冊として陽の目を見たもので，2009 年から 3 年間，本学の共同研究奨励助成を得て行った「戦後，とくに GHQ 占領期における在日華僑・在日朝鮮人の生活空間を明らかにする―横浜市・神奈川県内の動きを中心に」と題する共同研究の成果報告書である。

プランゲ文庫とは，周知のごとく，GHQ が 1945 年から 50 年にかけて検閲機関を設けて日本各地で発行された出版物を提出させたが，その後それらをアメリカに運んで保存するのに尽力した人の名を冠してそう呼んでいるもので，その資料群（マイクロ）を本学図書館が購入したことをきっかけにして，その資料を利用して戦後の日本を様々な角度から研究しようと思い立って始めたのが私たちの共同研究となった。

といっても，自分の関心を持つテーマをプランゲ文庫だけを使って明らかにするのは不十分で，他の資料を探しに図書館通いをすることにもなったが，共同研究を組んだメンバーの関心からおのずと在日華僑や在日朝鮮人についての諸事情を調べ，それを報告し合って，今回の一冊にたどり着くことになった。以下は，執筆者とタイトル一覧である。

論文篇

尹健次「在日朝鮮人運動と日本共産党―階級か，民族か」

小林聡明「GHQ 占領期日本における朝鮮人メディアの世界―機関紙と雑誌に関する書誌的分析」

王雪萍「戦後期日本における中国人留学生の生活難と政治姿勢をめぐる葛藤―救済金問題を事例に」

何義麟「戦後台湾人留学生の活字メディアとその言論の左傾化」

陳祖恩「戦後上海日本資産の接収と処理」

孫安石「上海の『亜洲世紀』が見た戦後日本の政治」

朴晋雨「日本の新聞・雑誌にみる昭和天皇の戦争責任」

田畑光永「吉田書簡から日中共同声明へ―捨てられた先達の苦心」

資料篇

小林聡明「在日朝鮮人刊行雑誌（朝鮮語）記事リスト」

田遠「終戦直後における中国人日本留学生に関する年表」

大里浩秋「日本に於ける中国関係雑誌記事目録 1945～49 年」

（大里浩秋）

1. 書名：『植民地近代性の国際比較――アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』
2. 編者：永野善子
3. 出版社：御茶の水書房
4. 出版年月：2013 年 3 月
5. ページ数：308 頁

日本ではこの 10 年間，朝鮮史研究を軸として「植民地近代性」について多くの議論が展開されてきた。さまざまな解釈が可能であるものの，一般論として，「植民地近代性」の概念は，植民地的要因が植民地時代に限定されて存在するのではなく，植民地以後にも残滓として各社会の底辺を形づくっている点に着目している。「ポストコロニアル」という概念が，こうした植民地遺制の否定的側面を強調し，それからの脱却の道を模索する思考様式をもつのに対して，「植民地近代性」の概念は，植民地時代に外部から導入され，あるいは新たに創造された諸要因が，独立後に各社会

における自律的要素として自己展開し，その社会の中枢的構造をかたちづくっているという現実を直視する。したがって，植民地近代性とポストコロニアルとは，ひとつの事象に対して相反する特徴を照射しているが，いずれもポストモダンの影響のなかで歴史学のなかに持ち込まれた概念であるという意味で共通性がある。

本書は，こうした問題意識のもとで，「帝国」，「植民地主義」，「ナショナリズム」，「国民国家」，「脱植民地化」，「エスニシティ」などの議論と接点をもちながら，アジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸地域における植民地近代性のありようについて実証的考察をおこなうことをめざした共同研究の成果である。本書の構成は以下のとおりである。

第 1 章：親日であれ親米であれ我が郷土――植民地台湾で育った米軍政下琉球の沖縄行政官　泉水英計
第 2 章：脱植民地化の課題と左翼ナショナリズム――金斗鎔の場合　尹　健次
第 3 章：抵抗の歴史としての反米ナショナリズム――レナト・コンスタンティーノを読む　永野善子
第 4 章：植民地期タガログ語短編小説にみる教育と近代――農村・学歴・植民地都市　岡田泰平
第 5 章：非常事態時期マラヤにおける植民地的／冷戦的近代化とその横領――スクウォッター再定住事業と植民地政府，華人有力者，地域住民　村井寛志
第 6 章：相互行為としての制度――タイ農村における研修と選挙の集まりの場から　高城 玲
第 7 章：タイ近代性としての小農的世界――タイ東北部市場における米の価格形成の問題を中心にして　菅原 昭
第 8 章：アフリカの植民地近代性――「宗教」の侵入について　中林伸浩
第 9 章：スワヒリ語による国民国家建設と植民地近代性論――その可能性と不可能性をめぐって　小馬 徹
第 10 章：ラテンアメリカにおける西欧中心主義近代化思想の克服――ボリバル，マルティ，キューバ，ボリビア　後藤政子

（永野善子）

1. 書名：『海外神社跡地の景観変容―さまざまな現在（いま）―』
2. 著者：中島三千男
3. 出版社：御茶の水書房
4. 出版年月：2013 年 3 月
5. ページ数：119 頁

神社と言えば日本国内だけに建てられたものだと思っている人は結構多い。しかし実は，近代日本において，日本人の海外進出や大日本帝国の「勢力圏」の拡大に伴って，海外に多くの神社が建てられた。これらの神社は「海外神社」と呼ばれ，現在判明しているだけでも 1600 余社にのぼる。その大部分はアジア地域，日本の「勢力圏」に建てられた神社であるが，言うまでもなく，これらの神社は 1945 年の日本の敗戦，「大日本帝国」の崩壊とともに，その機能を停止した。

この海外神社研究そのものは，1990 年代以降，国内外で急速に進んでいったが，本書は海外神社そのものの研究ではなく，その機能を停止した海外神社（跡地）が，半世紀以上を経た現在，アジア各地にさまざまに景観を変容させて，多様な形で存在していることを初めて網羅的・体系的に明らかにしたものである。

さらに，その多様な景観変容の要因を分析することにより，海外神社（跡地）の現在の姿は，たんに過去（戦前）の残影，残滓というよりも，当該地域・国の日本との関係を含めた，現在（いま）をあぶりだすものになっていることを明らかにした。

なお，本書は本学が 2003 年から 2007 年にかけて文部科学省によって採択された 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究成果叢書（神奈川大学評論ブックレット 37）として刊行されたものである。

（中島三千男）

1. 書名：『ダイムノヴェルのアメリカ　大衆小説の文化史』
2. 著者：山口ヨシ子
3. 出版社：彩流社
4. 出版年月：2013 年 10 月
5. ページ数：388 頁

本書は，19 世紀後半から 20 世紀の初頭にかけてのアメリカでとくに人気の高かったダイムノヴェル（10 セント小説）を分析したものである。「低俗」といわれて消えてしまったこの廉価な大衆小説群の特徴を分析し，歴史書などには表われない，物語をめぐるさまざまな裏面史や周辺史を掘り起こすことで，アメリカ社会の底辺に蓄積された庶民の文化的営為の実相に迫り，アメリカ人に形成された集合的意識を探ろうとするものである。

ダイムノヴェルの出版形態がそれ以前の小説と異なったのは，規格化され，シリーズ化されて，大量にでまわったことであるが，これは，アメリカの産業資本主義経済のシステムのなかに，物語本が消費されるべき商品としてとり入れられたことを意味する。安価なパルプの製造，印刷技術の革新による再版工程の簡略化，輸送機関の拡充などにともなう販売経路の整備など，廉価な物語本の出版と販売を可能にする科学技術に支えられ，出版社は，工場で商品を生産するように，同じパターンの物語を次つぎと出版し，より多くの読者に買わせるべく戦略を編みだした。一方，消費する商品のように次つぎと同じパターンの本を購入し，気軽な娯楽として読書を楽しんだ大勢の読者は，そのような読書をとおしていわば集合的な意識を形成するようになる。携帯に便利な小型本の出現で，いつでもどこでも個人としての読書が可能になる一方で，規格化された本を読み続けることで，大勢の読者が同様の意識を形成することになったのである。ダイムノヴェルを現代に読む意義は，一つに，その影響が，アメリカの人種差別や性差別などの意識構造の基礎として，時代をこえて現在まで続いているという現実を確認することにある。

本書は，アメリカ国家の重要案件事項といえる先住民問題や奴隷問題を扱った初期のダイムノヴェルから，とくに少年読者を熱狂させたといわれるウェスタン・ヒーローもの，探偵小説，サイエンス・フィクション，そして「ワーキングガール」と呼ばれる都市の白人女性労働者に向けて書かれたダイムノヴェルまで，それらを「ネイティヴ・アメリカンからワーキングガールまで」をキーワードにしてまとめたものである。

（山口ヨシ子）